国際ビジネスパーソンのための世界史

世界史のなかのパンデミック

アテネがスパルタに敗れたのも、宗教改革が行われたのも、カナダがアメリカに統合されなかったのも、ナポレオンがロシア遠征に失敗したのも、南アのアパルトヘイトも全て感染症パンデミックが関係していた。
名物講師による、国際ビジネスマンのための白熱の世界史。
（日外協オンライン特別公開講座から）

スタディサプリ　世界史講師　**村山秀太郎**

感染症パンデミックがなかったら世界の歴史は変わっていたに違いない。

スパルタに攻められ“３密”になったアテネ

古代ギリシアの２大ポリス（都市国家）といえばアテネとスパルタ。民主主義発祥の地であるアテネがスパルタに敗れた戦いがペロポネソス戦争だった。戦争が始まった２年後の前429年にアテネでは感染症が流行し、人口の４分の１と、傑出した指導者ペリクレスを失った。籠城戦を余儀なくされたアテネは“３密”になったのだ。もしこの感染症がなかったら、アテネの急速な衆愚政治化やマケドニアの台頭はなかったかもしれない。

蚊にやられたアレクサンドロス大王

その古代のマケドニアであるが、現在の「北マケドニア共和国」よりも南のギリシア第２の都市テサロニケを中心とする地域である。前４世紀にアレクサンドロス大王は、東はインダス川に至る広域を支配したものの、マラリア（悪い空気）と推定される感染症により30代前半にしてバビロンで急逝した。蚊にやられたのだ。

マラリアといえば、日本でも平清盛、アメリカ南北戦争の南軍兵の半数、太平洋戦争時にルソン島、ガダルカナル島などで戦った日本兵の多くが犠牲になった。

感染症で衰退したローマ帝国

アレクサンドロス大王の後継者たちの王国群、いわゆるヘレニズム諸国家は大王の足跡と言っていい。西はマケドニア（現在のギリシア北部）から東はインダス川沿いの現在のパキスタンまでの広範な地域。だが、共和政時代のローマの軍門に下り、前27年から帝政時代が始まる。ローマ帝国の最盛期はいわゆる五賢帝時代（96～180）。その領土は東はティグリス、ユーフラテス川流域のメソポタミア（現在のイラク）、南はナイル川流域（同エジプト）、西はヒスパニア（同スペイン）、北はブリタニア（同英国）にまで及んだ。だが、五賢帝時代の末期にイランのパルティアの都市クテシフォン攻略の際に感染したウイルスにより、イタリア半島に住む人たちの３分の１が死亡。ローマ帝国は衰退へと向かい、395年に東西に分裂した。

東ローマ帝国（ビザンツ帝国）では６世紀のユスティニアヌス大帝の治世の541年（543年説も）に、都市コンスタンティノープル（今のイスタンブール）が最古のパンデミックに見舞われ、ピーク時には１日に１万人が死亡した。

一方、西ローマ帝国ではマラリアが大流行したため、410年のゲルマン人である西ゴート人